様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２１５０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４３０７

研究課題名（和文）子どもを持たない中・高齢者の主観的幸福感－キャリア変数による比較，世代性との関連

研究課題名（英文）Subjective Well-being in middle and old aged non-parents

研究代表者
沼山　博（NUMAYAMA, Hiroshi）

山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授

研究者番号：００２８５６７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中・高年期の既婚成人の幸福感を取り上げ、子どもの有無によるその規定因の違いや、世代性や夫婦関係のような心理的変数との関連、そして就業状況のようなキャリア変数との関連について、オンライン調査を通して、検討することを目的としたものである。結果としては、子どもの有無によって主観的幸福感には有意差はみられず、子どもをもたない人でも世代性行動を行い、世代性関心を高めることが幸福感につながることが示された。また、中年期では、子どもをもたない人のほうがもつ人よりも夫婦の共行動や親密性の程度が高く、夫婦共行動をして、親密度を高めることが幸福感につながっていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の社会的意義としては、まず子どものいる人はいない人よりも幸福であるという一般的な認識は、必ずしもそうとはいえない可能性を示した点があげられる。また、次に続く世代にかかわることが幸福感につながりうるのは、子どもの有無にはよらないものであり、子どものいない人の幸福感を高める方法の１つであることも示した。学術的意義としては、本研究は人間の生涯を複線的に、文脈的にとらえようとした嚆矢である点があげられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined differences in determinants of well-being between parents and non-parents in middle and old aged. Four online surveys has been conducted of parents and non-parents aged 45 to 80. The subjective well-being scores were not significantly different between the above two groups. Structural equation modeling indicated that generative behaviour predicted higher levels of generative concern and, in turn, generative concern predicted higher levels of subjective well-being. Differences in this association were neither evident for parents and non- parents nor for men and women. The frequency of actions as a couple and the degree of intimacy with one's spouse in non-parents were higher than in parents. Hierarchal multiple regression analysis and mediation analysis indicated that actions as a couple predicted higher levels of subjective well-being through the medium of intimacy with one's spouse in non-parents.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：幸福感　子どもの有無　世代性　夫婦関係　生涯発達心理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国では 1989 年に合計特殊出生率がそれまでの最低値であった 1966 年（丙午）を下回る 1.57 を記録し，以来少子化は高齢化とともに社会問題となってきた。確かに少子化は労働力人口の減少をもたらし，社会保障の維持や産業構造の変容など，社会全体に大きな影響を与えるものではあるが，少子化の要因としてあげられる晩婚化や未婚化からもわかるように，少子化社会とは同時に子どもを持たない成人の比率が高い社会でもある。内閣府（2014）によると，2010 年における生涯未婚率は男性 20.14%，女性 10.61%であり，それぞれ 2 割，1 割を初めて越えた。また，国立社会保障・人口問題研究所（2012）では，結婚持続期間が 15―19 年の夫婦における出生子ども数 0 人の割合は 2010 年に 6.4%と，2002 年の 3.4%から倍に上昇している。この状況は，わが国においても，成人して結婚して，子どもをもうけるというライフコースが一般的でなくなってきたことを示唆するが，子どもを持たないことは，成人の人生や生活に一体どのような心理的影響を与えるのであろうか。本研究の基本的な問題意識はここにある。

２．研究の目的

子どもを持たないことは，成人の人生や生活に一体どのような心理的影響を与えるのであろうか。本研究は，特に中・高年期の既婚成人の主観的幸福感を取り上げ，子どもの有無による規定因の違いや，世代性や夫婦関係のような心理的変数との関連，そして就業状況のようなキャリア変数との関連について，Web 調査を通して，検討していくことを目的とする。

３．研究の方法

次の４つの調査についてインターネットを用いて実施した。

１）中年期既婚成人約 600 名に対する調査Ⅰ

45～60 歳の既婚成人（子ども有・無）を対象に，次の事項について調べた。

①幸福感
②夫婦の共行動
③夫婦の親密性
④世代性関心
⑤社会的活動
⑥次世代育成のためのかかわり
⑦人口学的変数など

２）中年期既婚で子どもをもたない成人約 180 名に対する調査

１）の対象者のうち，子どもをもたない成人を対象に実施し，主観的幸福感と世代性関心，世代性活動の規定関係を短期縦断データ（24 か月をおいた２時点調査）によって確認しようとした。

３）中年期既婚成人約 720 名に対する調査Ⅱ

45～60 歳の既婚成人（子ども有・無）を対象に，幸福感と世代性関心，世代性活動の規定関係を就業形態別に検討した。

４）高齢期既婚成人約 540 名に対する調査

１）のほぼ同様の項目について調べた。

４．研究成果

１）中年期における子どもの有無と主観的幸福感の規定因

中年期の主観的幸福感の規定因として,夫婦関係や世代性,そして人口学的変数を取り上げ,これらが子どもの有無によってどう異なるか，特に行動面から検討した。その結果，主観的幸福感については得点に子どもの有無による統計的な違いはなかった。次に，主観的幸福感の規定因について,階層的重回帰分析で分析したところ,まず男女とも子どもの有無にかかわらず,夫婦関係（夫婦の共行動）が正の影響を持っていた。男性では，子どもの有無にかかわらず,世帯年収が正の影響を持っており，世代性（社会的活動・次世代育成のための関わり）は影響が認められなかった。女性では，子どもの有無によって違いがあり，子どもをもつ場合は，夫婦の共行動，世帯年収，そして世代性のなかでも社会的活動が正の影響を持っていた。他方,子どもをもたない場合は，夫婦の共行動，そして世代性のなかでも次世代育成のための関わりが正の影響を持っていた。

Table 1：中年期における子どもの有無と主観的幸福感の規定因

	男性		女性	
	子あり	子なし	子あり	子なし
夫婦の共行動	○	○	○	○
世帯年収	○	○	○	
社会的活動			○	
次世代育成				○

２）中年期における夫婦関係と主観的幸福感の関係
　夫婦関係は夫婦の共行動の頻度と配偶者に対する親密性で把握した。子どもの有無および性別で比較すると，両者とも性別にかかわらず子どもをもつ人よりももたない人のほうで得点が有意に高かった。階層的重回帰分析および媒介分析を行ったところ，子どもをもたない男女および子どもを持つ男性では，夫婦の共行動が，配偶者に対する親密性を媒介して，主観的幸福感を高めているが，一方子どもをもつ女性では，配偶者に対する親密性が媒介することなく，夫婦の共行動が直接主観的幸福感を高めていることが分かった。

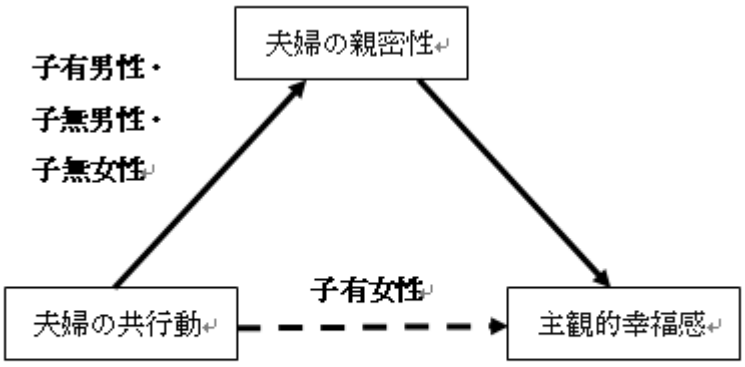

Figure1　夫婦の共行動が夫婦の親密性を媒介して主観的幸福感に与える影響

３）中年期における世代性と幸福感の関係
　世代性は世代性関心と世代性行動からなる。まず子どもの有無および性別で程度を比較すると，両者とも，女性より男性が，子どもを持たない人より持つ人で得点が有意に高かった。世代性行動,世代性関心,主観的幸福感の規定関係を構造方程式モデリングにより調べたところ，子どもの有無および性別にかかわらず，世代性行動が世代性関心を高め，さらに世代性関心が主観的幸福感を高めることが示唆された。この規定関係は，子どもを持たない者を対象とした短期縦断データ（24 か月をおいた２時点調査）によっても確認された。また，女性を就業形態別に分けてみても確認された。

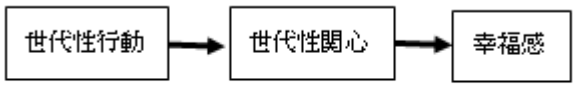

Figure2 世代性行動・世代性関心・幸福感の規定関係

４）高齢期における世代性と幸福感
　幸福感は，高齢期においても，子どもの有無による有意な差はみられなかった。他方，世代性関心，世代性行動共に，子どもをもつ人のほうがもたない人よりも有意に得点が高かった。世代性と幸福感の規定関係についても，Figure2 と同様の構造性が示された。

５）本研究のインパクト
　本研究の成果が社会および学界に与えたインパクトとしては次の点が指摘できる。
・世界的に子どもをもつ人のほうが幸せであるという通俗理論があるようであるが，本研究では中年期でも高齢期でも子どもの有無で幸福感に有意差は認められず，こうした通俗理論を再考する一助となりうる。
・本研究において，世代性行動→世代性関心→幸福感という規定関係が，中年期でも高齢期でも認められた。世代性は子どもをもたない人には関連が薄いと考えられがちであるが，本研究は，そうした人でも社会的ボランティア活動や社会活動のような行動によって，世代性を発達させ，さらには幸福感を高めることが可能であることを示唆する。
・中年期の夫婦関係と主観的幸福感の規定関係をみると，子どもをもつ女性以外は，夫婦の共行動→夫婦の親密性→主観的幸福感という関係があるが，子どもをもつ女性では夫婦の親密性による媒介がみられない。中年期の子ども有り女性の独特な状況が示唆される。
・本研究の学術的意義としては，本研究は人間の生涯を複線的に，文脈的にとらえようとしたものである点があげられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 福島朋子・沼山博	４．巻 89
２．論文標題 子どもを持たない中年期成人における世代性と主観的幸福感	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心理学研究	６．最初と最後の頁 551-561
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi.org/10.4992/jjpsy.89.17016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福島朋子・沼山博	４．巻 44
２．論文標題 中年期における子どもの有無と夫婦関係	５．発行年 2018年
３．雑誌名 応用心理学研究	６．最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） -	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 沼山博・福島朋子
２．発表標題 子どもをもたない有配偶女性の幸福感　　― 就労形態からの検討 ―
３．学会等名 日本応用心理学会第86回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Numayama, Tomoko Fukushima
２．発表標題 The relationship between generativity and subjective well-being in the middle-aged non-parents
３．学会等名 25th Biennial Meeting of International Society of Study of Behavioral Development (ISSBD)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 沼山博・福島朋子
２．発表標題 中年期における主観的幸福感と夫婦関係－性別と子どもの有無に着目して－
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 沼山博・三浦主博	４．発行年 2019年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 263
３．書名 子どもとかかわる人のための心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	福島　朋子 (FUKUSHIMA TOMOKO) (10285687)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授 (21201)	